

## 看護師のスピリチュアリティに関する研究 —PIL テストの分析より—

菊池 和子

### A Study on Spirituality of Nurses — The Analysis of Purpose-in-Life Test —

Kazuko Kikuchi

#### 要 旨

看護師のスピリチュアリティをPILテストの分析より明らかにし、看護師への支援の示唆を得ることを目的とした。対象は、実習指導者講習会参加看護職者42名(平均年齢 $36.8 \pm 5.3$ 歳、看護教育機関勤務者1名他病院勤務者)中研究参加同意の得られた41名である。調査方法は、Purpose-in-Life-Test (Franklのロゴセラピーに基づきJ.Crumbaughらが考案)を使用した。分析方法は、20項目からなるPILテストA得点の合計を算出(最高得点140点)。各項目は7段階評定尺度で、1項目7点となる。検定はt検定及び一元配置分散分析を行った。その結果、PILA得点平均 $92.7 \pm 14.27$ 点であった。先行研究による一般群より有意に点数が低く( $P < 0.01$ )、人生の意味・目的意識が低い結果である。項目別にみると平均点の高かったものは、9番「私の人生にはわくわくするようなことがいっぱいある」が $5.2 \pm 1.03$ 点、点数の低いものでは12番「私の生き方から言えば、世の中は非常にしっくりくる」が $3.9 \pm 1.18$ 点、17番「私には人生の意義、目的、使命を見出す能力が十分にある」が $4.0 \pm 1.73$ 点であり、両者とも先行研究一般群より有意に低い( $P < 0.001$ )。看護師は、一般成人より人生の意味・目的意識が低い結果である。また、人生にわくわくするようなことがあると感じながらも、自分の生き方から言えば世の中がしっくりくると思っておらず、自分には人生の意義、目的、使命を見出す能力が十分にあると思っていない傾向がある。今回の対象はほとんどが病院勤務の看護師であり在院日数の短縮によって労働環境が厳しいことが影響しているものと考えられる。日々の業務の中で自らが意味を見出しているように、労働環境の整備や必要があれば相談できるような窓口を設ける等の支援が必要であると考えられる。

キーワード：看護師、スピリチュアリティ、PILテスト

#### I. はじめに

医療制度の改革により入院患者の在院日数の減少に伴い看護職員の業務が過密になってきている。2007年度に開催された第38回日本看護学会—看護管理—学術集会においては、病院に勤務する看護師の離職に関するものや看護師のストレスに関する研究テーマの発表がみられた。その中で、調査対象となった大学病院に勤務している看護師のうち約半数が来年度の退職を考えていた、という報告<sup>1)</sup>もあった。看護師が離職を考える理由はさまざまであると考えられるが、2007年5月18

日付けの岩手日報に『増える超過勤務 看護師悲鳴』の見出しで全国大学高専教職員組合25病院の看護師5410人の回答による調査結果が紹介されている。その内容は、「国立大病院に勤務する看護師の超過勤務時間が長くなり、10人に8人が「翌日も疲れが取れない」と感じていること、61%が最近半年間に医療事故などにつながりかねないミスや「ヒヤリハット」を経験。19%が「いつも辞めたいと思っている」と回答。」の記事が掲載されている。

近年、新人看護師の離職対策についてクローズアップされてきているが、中堅の看護師も過重労働

働の状況にあり離職対策について考える必要があると思われる。

一方、看護の仕事の動機づけとして、「多くの看護の仕事は外的報酬よりむしろ内的なものに基づいている。つまり、多くの看護師は患者の苦しみを取り除くために、給料や地位が上がるような外的な報酬への欲求を犠牲にしている」という報告<sup>2)</sup>がある。筆者も看護師の多くは日々の過重な労働も仕事へのやりがいがあることで続けていくことにつながっている、と考えている。

以上の状況から、看護師はどのような思いで日々仕事をし、生活しているのか、人生の意味・目的意識をどのように体験しているかについて調査し、看護師への支援の基礎資料とすることを目的として本研究に取り組んだ。

調査にあたり、看護師が人生の意味・目的意識をどのように体験しているのか、 فرانクルの理論をもとに作成されたPILテスト(Purpose-in-Life Test)を使用し、看護師の人生の意味・目的意識について調査することとした。本調査では、人生の意味・目的意識をスピリチュアリティと、定義することとする。

## II. 目的

看護師のスピリチュリティをPILテストの分析より明らかにし、看護師への支援の示唆を得る。

## III. 研究方法

1. 調査対象：実習指導者講習会参加看護職者42名。42名の平均年齢 $36.8 \pm 5.3$ 歳、看護教育機関勤務者1名他病院勤務者である。その中で研究参加同意の得られた41名を対象とした。

2. 調査方法：PILテストを使用

1) PILテストについて

PILテストは、フランクルのロゴセラピーの考えに基づいて、アメリカのクランバウ(Crumbaugh, J.C)らによって人生の意味・目的意識を測定する道具として考案されたものである<sup>3)</sup>。PILテストは個人が人生にどんな意味や目的を見出しているかその内容や把握の度を調べるものである。

<ロゴセラピーの理論の3つの概念>

① 意志の自由

人間はいかなる状況においても、制約から自

由に自分の意志で行動を決定できる。それは心身次元を超越できる精神次元が備わっているからである。そこでは自分の自由意志からでた選択決定に対する責任も求められている。ロゴセラピーはこの三次元視座によって人間をスピリチュアルな存在としてとらえている。

② 意味への意志

どんな人間も意味あることをしたいという意志をもっている。

③ 人生の意味

今、この瞬間に私にしかできないことは何か。この瞬間に求められる。

以上の3つの柱からなる。

フランクルは意味実現に関して、創造ないし活動の中に実現化される創造価値、体験の中に実現される体験価値、人間が彼の生命の制限に対して実現化されるような態度価値が存在すると述べている<sup>4)</sup>。

PILテストは、日本では佐藤文子らが翻訳、標準化しており、医療・保健、産業保健、教育、矯正、福祉分野等で使用されている。1995年に保険適用が決まった。PILテストは、テストに記入すること自体が自己洞察を促し、ロゴセラピーとして機能する。

佐藤(1998)は、PILテストは直訳すれば「人生の目的検査」となり生きる意味・目的意識を測定する心理検査であるが、直訳のままでは硬すぎる感じがあり、「実存心理検査」、あるいは「生きがいテスト」という副題をつけて紹介しており<sup>5)</sup>、これは、生きがい研究から、また神谷美恵子の第二の意味の生きがい感がフランクルの意味感に近いという点からである<sup>6)</sup>と述べている。

神谷は、生きがいという言葉は日本特有なものであるが、この言葉の使い方は、二通りあり、この子は私の生きがいです、などという場合のように生きがいの源泉、または対象となるものを指す時と、生きがいを感じている精神状態を意味する時であり、後者はフランクルのいう「意味感」に近い、と述べている<sup>7)</sup>。

PILテストは、PartA, B, Cの3つの部分から構成されている。PartAは、質問紙法で態度スケールと呼ばれており、個人がどの程度に「人生の意味、目的」を体験しているかを問う20の項目から成っている。PartBは、13項目から成っている文章完成法である。

PartC は、自由記述の形式で、人生の意味、目的、そしてそれをどのように経験し、あるいは達成しているかについて記述を求めている。

2) 分析方法

本調査では 20 項目からなる PIL テスト A 得点の合計を算出(最高得点 140 点)した。

日本人被検者の PIL-A 総得点は、アメリカの被検者より全般的に低く、アメリカでは得点と年齢との間に一貫した関係はみられないとされているが、日本では年齢の上昇に伴い、得点が増加する傾向がみられる<sup>8)</sup>。各項目は 7 段階評定尺度で、1 項目 7 点となる。得点が高いほど、人生の意味、目的を体験していることを示す。

検定は t 検定及び各項目の平均値については一元配置分散分析を行った。

3. 調査日：平成 18 年 6 月

<倫理的配慮>

調査の趣旨、対象者の自由意志に基づく調査であること、無記名であり調査結果は本調査目的以外で使用しないことを文書と口頭で説明した。

IV. 結果

PILA 得点平均 92.7 ± 14.27 点であった。先行研

究による一般群(年齢 35 ~ 74 歳 n=1052)では、100.4 ± 17.24 点<sup>9)</sup>で、一般群の方が有意に点数が高く(P<0.01)、人生の意味・目的意識がある、という結果となっている。1995 年に報告されている香港の精神科看護師の PILA 得点<sup>10)</sup>は、97.3 ± 12.85 点であり、本調査より若干高い値であるが有意な差はみられない。

本調査結果は表 1 に示した。項目別にみると平均点の高かったものは、9 番「私の人生にはわくわくするようなことがいっぱいある」が 5.2 ± 1.03 点、2 番「私にとって生きることはいつも面白くてわくわくする」が 5.1 ± 1.15 点、13 番「私は責任感のある人間である」が 5.1 ± 1.35 点であった。

点数の低いものでは 12 番「私の生き方から言えば、世の中は非常にしっくりくる」が 3.9 ± 1.18 点でありこの項目は先行研究一般群<sup>11)</sup>より有意に低く(P<0.001)、17 番「私には人生の意義、目的、使命を見出す能力が十分にある」が 4.0 ± 1.73 点でありこの項目も先行研究一般群<sup>12)</sup>より有意に低く(P<0.001)、5 番「毎日がいつも新鮮で変化に富んでいる」が 4.2 ± 1.58 点、11 番「私の人生について考えると今ここにこうして生きている理由がいつもはっきりしている」が、4.3 ± 1.79 点であった。15 番「死に対して私は、十分に心の準備が出来ており、こわくない」は先行研究一般群より有意に低くなっている(P<0.01)。

表 1 Part-A 平均点の本調査の看護師の結果と一般成人の結果との関連

Part A 項目	本調査 看護師の平均(SD) n=41	一般成人の平均(SD) (佐藤ら,1998) n=1052	関連
1. 私はふだん：非常に元気いっぱいではきっている	4.7 (1.07)	5.3 (1.27)	n.s
2. 私にとって生きることは：いつも面白くてわくわくする	5.1 (1.15)	5.3 (1.15)	n.s
3. 生きていくうえで私には：非常にはっきりした目標や計画がある	5.0 (1.02)	5.2 (1.38)	n.s
4. 私という人間は：目的をもった非常に意味ある存在だ	4.8 (1.04)	5.3 (1.25)	P<0.05
5. 毎日が：いつも新鮮で変化に富んでいる	4.2 (1.58)	4.5 (1.62)	n.s
6. もしできることなら：この生き方を何度でも繰り返したい	5.0 (1.04)	5.1 (1.19)	n.s
7. 定年退職後(老後)、私は：前からやりたいと思っていたことをしたい	4.9 (2.12)	5.6 (1.66)	P<0.01
8. 私は人生の目標の実現に向かって：着々と進んできている	4.4 (1.37)	4.8 (1.50)	n.s
9. 私の人生には：わくわくするようなことがいっぱいある	5.2 (1.03)	5.1 (1.13)	n.s
10. もし今日死ぬとしたら、私の人生は：非常に価値ある人生だったと思う	5.0 (1.25)	4.9 (1.47)	n.s
11. 私の人生について考えると：今ここにこうして生きている理由がいつもはっきりしている	4.3 (1.79)	5.0 (1.49)	P<0.05
12. 私の生き方から言えば、世の中は：非常にしっくりくる	3.9 (1.18)	4.7 (1.30)	P<0.001
13. 私は：責任感のある人間である	5.1 (1.35)	5.6 (1.28)	P<0.05
14. どんな生き方を選ぶかということについて：遺伝や環境の影響にもかかわらず全く自由な選択ができる	5.0 (1.55)	4.5 (1.70)	n.s
15. 死に対して私は：十分に心の準備ができており、こわくはない	3.0 (1.70)	3.8 (1.89)	P<0.01
16. 私は自殺を：本気で考えたことはない	5.3 (2.03)	5.8 (1.86)	n.s
17. 私には人生の意義、目的、使命を見出す能力が：十分にある	4.0 (1.73)	4.8 (1.48)	P<0.001
18. 私の人生は：自分の力で十分やっつけている	4.6 (1.39)	5.2 (1.43)	P<0.01
19. 毎日の生活(仕事や勉強など)に私は：大きな喜びを見出し、また満足している	4.4 (1.41)	5.0 (1.30)	P<0.01
20. 私は人生に：はっきりとした使命と目的を見出している	4.8 (1.10)	5.0 (1.31)	n.s
計	92.7 (14.27)	100.4 (17.24)	P<0.01

t test

表2は、各項目間の関連を示している。9番「私の人生にはわくわくするようなことがいっぱいある」は、12番「私の生き方から言えば、世の中は非常にしっくりくる」より有意に得点が高く(P<0.01)、17番「私には人生の意義、目的、使命を見出す能力が十分にある」より有意に得点が高

かった(P<0.05)。

15番「死に対して私は、十分に心の準備が出来ており、こわくない」は、12番、17番以外の17項目より有意に得点が低かった(P<0.05, P<0.01, P<0.001)。

表2 項目間の関連

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
1																				
2																				
3																				
4																				
5																				
6																				
7																				
8																				
9																				
10																				
11																				
12		*							**											
13												*								
14																				
15	***	***	***	***	*	***	***	**	***	***	**		***	***						
16												**			***					
17			*						*							**				
18															***					
19															**					
20															***					

一元配置分散分析 \*P<0.05 \*\*P<0.01 \*\*\*P<0.001

## V. 考察

今回の調査で、看護師は一般成人より人生の意味・目的意識が低い結果である。また、人生にわくわくするようなことがあると感じながらも、自分の生き方から言えば世の中がしっくりくると思っていない傾向があり、自分には人生の意義、目的、使命を見出す能力が十分にあると思っていない傾向があることが示唆された。香港の精神科看護師の結果と有意差がなかったことは同じ東洋人であり、看護師であることで同様の傾向であったものと考えられる。

参考までに今回調査した PartB の「何より私がしたいのは」の文章完成法の記述では「ゆっくり休みたい」3名、「何にも縛られずに自由に思ったこ

とがしたい」5名、「やりがいのあると実感できる仕事」1名等の記述が14名にみられた。今回の対象はほとんどが病院勤務の看護師であり在院日数の短縮によって労働環境が厳しいことが影響し、休みたいという記述につながったものと考えられる。今回の対象は中堅の看護師であり、実習指導や新人教育に携わり、リーダーシップを発揮し活躍が期待される集団である。前述したフランクルのロゴセラピーの基本的概念にあったようにフランクルは意味を見出すのはあくまで本人であり、たとえ病人で、その病気がどのようなものであっても精神次元は侵されることはなく、誰でも意味を見出しうるとし、本人の責任を奪ってはならないとしている。そしてロゴセラピーは意味を見出すのを支援する立場である。今回の調査結果から、

看護師が日々の業務の中で自らが意味を見出していけるように、労働環境の整備や必要があれば相談できるような窓口を設けるなどの支援が必要であると考えられる。

PIL テストには人生の意味・目的意識を見出していることの一つとして態度価値である死生観を含んでいる。フランクは人間の生命の制限に対してどのような態度をとるかが重要であり人生はどのような極限状況においても最期の一瞬まで意味をもちえると考える。つまり死に対する態度については、人間に当然起こりうるものとして捉えている。

今回、「死に対して私は、十分に心の準備ができており、こわくはない」の結果は、一般成人よりネガティブに捉えている結果である。看護師は、最期を看取る役割のなかで、その体験がネガティブなものとして体験されたものと推測される。

筆者は、看護師は死を目前としている人も援助していくものとして、死を意味づける態度が問われるという立場に立っている。

医療が死を敗北として捉えていた時代が長かったことや、看護師は使命感やこうあらねばならないという反応から死についての恐い、嫌だ、逃げ出したい、という自分の感情を殺してしまいがちになるものと考えられる。その感情を充分出すことによって自分の感情を明確にし、この感情が死についての自分のイメージをつくり、死をより意味づけていけるものと考えられる。

フランクは、あくまで意味を見出すのは本人であり、ロゴセラピーは見出すための支援にすぎない、としている。そして、態度を変換するためにロゴセラピーが用いる種々の方法は、フランクが好んで適用した「ソクラテスの問答」をはじめとして、そこで検討された内容がより意味に満ち、より受け容れる価値があるとみえてくるように観点を変更する手助けである<sup>13)</sup>としている。今回の結果は看護職者が、日々の業務に疲弊しているような結果であった。看護職者への支援の方法の一つとして、フランクの言う自己距離化をはかり態度変換することがあげられる。つまり、自分のおかれている境遇を客観的に判断できるようにすることで、多忙さのゆえにできない部分に目を向けていたものを、肯定的な体験に目を向けていくという、心と身体の高次元の視座からの検討を、精神次元の三次元の視座から検討することで、より意味を見出していけるものと考えられる。

## VI. 結論

看護師への支援の示唆を得ることを目的として看護師のスピリチュアリティについてPILテストを分析し以下の点が明らかとなった。

看護師は、一般成人より人生の意味・目的意識が低い結果である。また、人生にわくわくするようなことがあると感じながらも、自分の生き方から言えば世の中がしっくりくると思っていない傾向があり、自分には人生の意義、目的、使命を見出す能力が十分にあると思っていない傾向がある。

今回の対象はほとんどが病院勤務の看護師であり、在院日数の短縮によって労働環境が厳しいことが本調査結果に影響しているものと考えられる。日々の業務の中で自らが意味を見出していけるように、労働環境の整備や必要があれば相談できるような窓口を設けるなどの支援が必要である。

## 謝辞

本研究の調査にご協力をいただきました看護職者の皆様に深謝します。

## 引用文献

- 1) 西竜介他：大学病院に勤務する看護師が離職を考える現状とストレスの関連，第38回日本看護学会抄録集，290，2007。
- 2) Charles Abraham and Eamon Shanley, *Social Psychology for Nurses Understanding interaction in health Care*, Edward Arnold, 1992. (菊池和子訳，第9章看護の仕事における満足と対処行動，細江達郎監訳：ナースのための臨床社会心理学看護場面の人間関係のすべて，北大路書房，245，2007.)
- 3) Crumbaugh, J.C. and Maholick, L.T. : *Manual of instructions for The Purpose in Life Test*. Psychometric Affiliates, Chicago 1969.
- 4) Frankl, Viktor.E. *Aerzliche seelsorge*, 1952 (霜山徳爾訳)，『フランク著書集2 死と愛』，3 - 31，みすず書房，1957。
- 5) 佐藤文子(監修)，『PIL テストハンドブック第1部 PIL テストの全体像と分析法』，5，システムパブリカ，1998。

- 6) 佐藤, 前掲, 12 - 13
- 7) 神谷美恵子, 『神谷美恵子著作集 I 生きがいについて』, 15, みすず書房, 1980.
- 8) 佐藤, 前掲, 22
- 9) 佐藤, 前掲, 101
- 10) Yiu-Kee, Chan :Existential correlates of burnout among mental health professionals in Hong Kong, Journal of Mental Health

Counseling, Apr95, Vol.17, Issue2, P220, 1995.

- 11) 前掲書 9)
- 12) 前掲書 9)
- 13) エリザベート・ルーカス(今井伸和訳) : 第 1 章ロゴセラピー—フランクルの遺産, 山田邦男(編), フランクルを学ぶ人のために, 12 - 27, 世界思想社, 2002.

### Abstract

#### PURPOSE

To find the characteristics of the spirituality of nurses.

#### METHODS

41 subjects were obtained at a workshop of clinical instructors in nursing.

Subjects were male (n=4) and female (n=37). Mean age was  $36.8 \pm 5.31$  years.

A 20-item (total score of 140) questionnaire, Purpose-in-Life (PIL) Test Part-A, was administered at the workshop. The PIL Part A is a 20-item scale designed to assess the degree to which a person experiences a sense of meaning and purpose.

#### RESULTS

Part A mean score =  $92.7 \pm 14.27$  The items with lower scores are: No.12 "As I view the world in relation to my life, the world fits meaningfully with my life" (Mean=  $3.9 \pm 1.18$ ), No.17 "I regard my ability to find a meaning, purpose, or mission in life as very great" (Mean=  $4.0 \pm 1.73$ ). Part A mean score was significantly lower than the general adult group in Japan (Sato et al., 1998) ( $P < 0.01$ ).

#### RECOMMENDATIONS

This study suggests that nurses think their ability to find meaning and purpose in life is low. The low PIL score may be caused by the increased nursing service due to the decrease of the length of hospitalization. Nurses are in need of support in order to find meaning in their work.

**Keywords :** Nurses, Spirituality, PIL-Test